



Title	マサイ語の名詞分類にむけて
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 1995, 6, p. 53-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マサイ語の名詞分類にむけて

稗田 乃

1. はじめに

ナイル諸語、とくに南ナイル諸語と東ナイル諸語に属する言語の文法を記述するとき、名詞の複数形成についての記述は不十分なものであった。たとえば、タッカーは、マサイ語の文法記述において、複数形は個々の名詞ごとに覚えなければならないと、また、ホリスは、マサイ語の文法記述のなかで最も複雑なのは名詞の複数形成であると、述べている。¹⁾ それでは本当に、タッカーが言っているように、マサイ語の文法体系のなかで名詞の複数形成には規則性が存在せず、複数形は個々の名詞ごとに記憶しなければならないようなものであろうか (Tucker & Mpaayei: 1955, pp. 4-5)。ホリスやキッチングは、ナイル諸語の名詞の複数形成に関係する接尾辞を、バントゥー語研究の成果にのっとして分析しようと試みた。²⁾ バントゥー語においては、名詞は、接頭辞の特徴によって容易に分類することが可能であり、しかも、対になっている単数の名詞類と複数の名詞類を容易に見つけることができる。だが、ホリスやキッチングのナイル諸語の名詞の複数形成を明らかにする試みは、彼らが指摘する複雑さ故に成功しなかった。彼らが指摘する複雑さとは、以下のようなものである。

- ・単数と複数の対となる名詞類を決定しても、例外があまりに多い。
- ・単数形にたいして、複数形が一定しない。

例えば、タッカーとムパイエイの「マサイ語文法」付録の語彙集を精査すると、単数形に接辞されて複数形をつくる接尾辞だけでも14種類が見つかる。³⁾ また、同じ形をした接尾辞が、ある名詞においては、単数形に付加されて複数形をつくるのに用いられたり、別の名詞では、複数形に付加されて単数形をつくるのに用いられる。このように接尾辞の種類の多いことや、同じ形式の接尾辞がときには単数形を、またときには複数形をつくるのに用いられることが、例外が多いという従来の指摘の原因になっている。 複数形が一定しないとは、つまり、言語体系内で1つの単数形にたいして、2つ以上の複数形が存在すること、また、個人語レベルにおいても、1つの単数形にたいして、2つ以上の複数形

が存在することである。1つの単数形から複数個の複数形が形成されるばかりでなく、1つの複数形から複数個の単数形が形成されることもある。このように言語体系内でも、個人語のレベルにおいても、ある種の「ゆれ」が存在するといえる。

従来の研究の失敗は、バントゥー語研究の方法をそのままナイル諸語研究にあてはめたことである。とくに、単数と複数の対の類を決定して、その類を固定的に考えたことにある。従来の研究の不備を克服するには、我々にはわからなかった名詞の分類がナイル諸語には存在し、その分類に従って名詞の複数形、あるいは、単数形が形成されていると考えるべきである。また、ある1つの名詞がどのカテゴリーの類に属するか「ゆれ」が存在すること、これが言語体系内での「ゆれ」を生じさせる。また、話者がある1つの名詞をどのカテゴリーの類に所属させるか「ゆれ」が存在すること、これが個人語レベルでの「ゆれ」を生じさせる。たとえば、ある話者が名詞AをカテゴリーXに所属すると考えれば、その複数形は $Ax - pl$ になり、もし、同じ名詞AをカテゴリーYに所属すると考えれば、その複数形は $Ay - pl$ になる。こうして名詞Aに複数個の複数形 $\{Ax - pl / Ay - pl / Az - pl / \dots\}$ が存在することになる。

このような名詞における範疇化は、あらゆる言語で普遍的な現象と考えられる。ただし、どのようなカテゴリーに範疇化するかは、それぞれの言語で異なっているのは当然である。英語であれば、そのカテゴリーは可算名詞と不可算名詞を分けるカテゴリーであり、独語や仏語であれば、文法「性」であり、日本語であれば、数量詞を決定するカテゴリーである。

本論では、マサイ語における名詞の複数／単数形成には規則性が存在することを証明し、複数／単数形成のやり方を手がかりにマサイ語の名詞の分類を試みる。

2. 数の接尾辞

名詞分類のカテゴリーについての議論にはいる前に、マサイ語の名詞の複数／単数形をつくる接尾辞について、おもに形式の面から述べておこう。用いる資料は、タッカーとムパイエイの「マサイ語文法」の末尾にある語彙集である。⁴⁾

2. 1. 複数形をつくる接尾辞

単数形を基準にして単数形に付加されて、複数形をつくる接尾辞がある。⁵⁾

2. 1. 1. 接尾辞 -i

- ・この接尾辞で複数形がつくられる名詞の数は、最も多い。

・この接尾辞は生産的で、この接尾辞で複数形が形成される名詞類は、開かれた類と考えられる。なぜなら、借用語の多くがこの接尾辞によってその複数形がつけられる。

例) em-buku (sg.) im-buku-i (pl.) 'book'

・接尾辞-iと接尾辞-(i)nでつけられる複数形が共存することがある。

例) en-kampi (sg.) in-kampi-i / in-kampi-n (pl.) 'camp'

・複数形に接辞して、複数形の複数形ともいえる複数形を形成する。これは、「集団が複数個、存在すること」を含意する。

例) in-kerra (pl.) in-kerra-i (pl.) 'sheep'

・重複された語幹に、接尾辞-iが接辞されることがある。ただし、1例のみ記録されている。

例) ank-alo (sg.) ink-alol-i (pl.) 'side, direction'

2. 1. 2. 接尾辞 -ni

・この接尾辞で複数形がつけられる名詞は数が多い。

・この接尾辞は生産的で、この接尾辞によって複数形が形成される名詞類は、開かれた類と考えられる。なぜなら、借用語の複数形がこの接尾辞によってつけられることがある。

例) ol-disi (sg.) il-diisii-ni (pl.) 'district commissioner'

・この接尾辞が接辞される名詞は、その単数形が必ず母音で終わる。

例) en-kijiko (sg.) in-kijiko-ni (pl.) 'spoon'

唯一の例外として、en-lukutuk (sg.), in-lukutuku-ni (pl.) 'motor-cycle'が存在する。しかし、この名詞は擬音語と考えられ、その複数形の語幹からみて、その単数形は*en-lukutukuと考えてよい。

・接尾辞-niとつぎに述べる接尾辞-nは、1つの形態素の異形態である可能性がある。接尾辞-niが接辞される名詞は、その単数語幹が3音節以上からなるものが圧倒的に多い。一方、接尾辞-nが接辞される名詞は、その単数語幹が2音節からなるものが多い。これら2つの接尾辞は、何らかの音韻論的な条件での異形態の可能性が高い。

2. 1. 3. 接尾辞 -n

・この接尾辞で複数形がつけられる名詞は、接尾辞-iによって複数形がつけられる名詞について数が多い。

・この接尾辞が接辞される名詞は、その単数形が必ず母音で終わる。

例) enk-anasa (sg.) ink-anasa-n (pl.) 'town'

・この接尾辞が接辞される名詞は、その単数語幹が2音節からなるものが多い。また、この接尾辞で複数形がつくられる名詞のなかに借用語はない。

例) ol-kondi (sg.) il-kondi-n (pl.) 'harlebeest'

2. 1. 4. 接尾辞 -in

・この接尾辞で複数形がつくられる名詞は6例記録されている。そのうちの4例は、その単数形が子音で終わっており、2例は、その単数形が母音で終わっている。

例) e-sarng'ab (sg.) i-sarng'ab-in (pl.) 'mud'

ol-dia (sg.) il-die-in (pl.) 'dog' (a→e/_i ?)

・6例のほかに、単数形が母音で終わりながら、その母音が脱落して接尾辞-inが接辞されて複数形が形成される名詞が、2例記録されている。

例) en-jore (sg.) in-jor-in (pl.) 'war'

2. 1. 5. 接尾辞 -o/-a

・この接尾辞によって複数形がつくられる名詞は、かなり多い。

・接尾辞-oを接辞するか、接尾辞-aを接辞するかは、語幹の母音によって決定される。もし、語幹が[+ATR]母音を持てば、接尾辞-oが接辞され、語幹が[-ATR]母音を持てば、接尾辞-aが接辞される。⁶⁾

・接尾辞-aが接辞される名詞には、明らかに動詞から派生された名詞が存在する。そのとき、動詞から名詞を派生する語幹形成辞は、-VIである。接尾辞-oが接辞される名詞には、動詞から派生された名詞は見あたらないようである。

例) e-remet (sg.) i-remet-a (pl.) 'spear' ← a-rem 'to spear'

・語幹に接尾辞-aが接辞されるとき、その前の母音が音韻変化を起こすことがある。

例) ol-oyiole (sg.) il-oyiotia-a (pl.) 'riddle' (e→ia/_a)

2. 1. 6. 接尾辞 -(i)lo/-la

・接尾辞-loが接辞されるか、接尾辞-laが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。

例) ol-ale (sg.) il-ale-ta (pl.) 'calf pen'

・接尾辞-laが接辞される名詞は、7例記録されているが、そのうちの6例は、その単数形が母音/e/で終わる。しかも、そのなかの1例は、明らかに動詞からの派生名詞である。

例) o-rripie (sg.) i-rripie-ta (pl.) 'guard-hut' ← a-rrip 'to guard'

この複数形の語幹末の母音／e／を後続する接尾辞の一部と考えれば、接尾辞は-etと-aの組合せからなると解釈できる。この接尾辞-etは、2. 1. 5の語幹形成辞と同じものと考えられる。このことから、2. 1. 6の類に属する名詞で、複数の接尾辞-taを持つ名詞は、その単数形が、本来、語幹形成辞-elを持ち、この語幹形成辞-elの末尾の子音／t／が脱落したと考えられる。もしそうなら、これらの名詞は、2. 1. 5の類に入れることができる。

・接尾辞-loが接辞される名詞は、その単数形が母音／i／で終わるものが2例記録されている。また、単数形が子音で終わる名詞は、その複数形が接尾辞-iloによってつくられる。この複数の接尾辞-iloを語幹形成辞-ilと数の接尾辞-oとの組合せと考えれば、単数形が母音／i／で終わる名詞は、語幹形成辞の末尾の子音／t／が脱落したものであり、単数形が子音で終わる名詞は、語幹形成辞-ilの全体が脱落したものと考えることができる。もし、そうなら、これらの名詞も、2. 1. 5の類に入れることができる。

2. 1. 7. 接尾辞 -t

・この接尾辞によって複数形がつくられる名詞は、2例のみ記録されている。そして、その単数形は、必ず母音／a／で終わる。

・この類に属する名詞には、明らかに動詞から派生したものがある。

例) en-kiguena (sg.) in-kiguena-t (pl.) 'consultation'
← a-iguen 'to advise'

2. 1. 8. 接尾辞 -(i)tin

・この類に属する名詞のうち、4例のみがその複数形に接尾辞-tinをもつ。ただし、この場合、語幹は必ず母音／i／で終わっている。この語幹末の母音を接尾辞の一部と考えれば、数の接尾辞は、すべて-itinという形式になっていると考えられる。

例) enk-ai (sg.) ink-ai-tin (pl.) 'rain, sky'

・複数形が／i t i n／で終わる名詞、12例のうち6例は、その複数形が／r i t i n／、あるいは、／r r i t i n／で終わる。しかも、語幹は、必ず母音／o／、あるいは、／a／で終わる。

・この類に属する名詞には、明らかに形容詞から派生したと考えられるものがある。

例) e-ng'eno (sg.) i-ng'enor-itin (pl.) 'cleverness'

2. 1. 9. 接尾辞 -ra, -rak, -re, -rei

・これらの接尾辞によって複数形がつくられる名詞は、それぞれ1例のみが記録されて

いる。

例) ol-ashe (sg.) il-ashe-ra (pl.) 'brother'

・この類に属する名詞のうち、明らかに動詞から派生したと考えられるものが1例、存在する。

例) e-murata (sg.) i-murata-re (pl.) 'circumcision'

← a-murat 'to circumcise'

・接尾辞-reiは、複数形に接辞され、「複数形の複数形」とも呼べる集合的複数形をつくる。

例) in-coo (pl.) in-coo-rei (pl.) 'herds'

2. 1. 10. 接尾辞 -itie

・この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、6例のみが記録されている。そのうちの3例は、身体名称であり、残りの3例は、屋敷の構成部分を表す名詞である。

例) enk-aya (sg.) ink-aya-itie (pl.) 'stomack'

(em)-boo (sg.) im-boo-itie (pl.) 'kraal'

2. 1. 11. 接尾辞 -ie

・この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、1例のみが記録されている。しかも、それは、身体名称である。

例) en-kutuk (sg.) in-kutuk-ie (pl.) 'mouth'

2. 1. 12. 接尾辞 -ishi

・この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、5例のみ記録されている。そのうちの4例は、家畜に関連する意味をもつ名詞である。

例) ol-amuye (sg.) il-amuye-ishi (pl.) 'male donkey'

2. 1. 13. 接尾辞 -ok/-ak, -ek, -(i)k

・接尾辞-okを接辞するか、接尾辞-akを接辞するかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。これらの接尾辞で複数形がつくられる名詞は、8例記録されているが、そのうちの4例は人間を、3例は動物を、1例は「水」を表す名詞である。また、明らかに形容詞から派生したと考えられる名詞が存在する。

例) ol-moruo (sg.) il-moru-ak (pl.) 'old man'

← moruo (sg.) moruak (pl.) 'old'

・接尾辞-ekで複数形がつくられる名詞は、2例のみが記録されている。その2例とも

身体名称であり、しかも、単数形が必ず母音 /u/ で終わる。

例) en-keju (sg.) in-kej-ek (pl.) 'fool'

・接尾辞-(i)kで複数形がつくられる名詞は、1例が動詞から派生した名詞である。1例は、その単数形が /to/ で終わり、身体名称である。また、1例は、語幹に一部の重複と接尾辞-kによって複数形がつくられる。

例) en-daa (sg.) in-da-ik (pl.) 'food' ← a-daa 'to eat'

ol-oito (sg.) il-oi-k (ol.) 'bone'

enk-aji (sg.) ink-ajiji-k (pl.) 'house'

2. 1. 14. 接尾辞 -ji, -ja

・この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、2例のみ記録されている。そのうちの1例は家畜に関連する意味をもつ名詞で、1例は身体名称である。

例) en-kine (sg.) in-kine-ji (pl.) 'goat'

ol-lau (sg.) il-lau-ja (pl.) 'heart, spirit'

2. 2. 単数形をつくる接尾辞

複数形を基準にして、複数形、あるいは、複数形とほぼ同じ形式に接辞して単数形をつくる接尾辞がいくつか存在する。

2. 2. 1. 接尾辞 -o/-a

・接尾辞-oが接辞されるか、接尾辞-aが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。語幹が [+ATR] 母音をもてば、接尾辞-oが接辞され、語幹の母音が [-ATR] 母音をもてば、接尾辞-aが接辞される。

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞は、かなり数が多い。

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞のなかには、明らかに動詞から派生したと考えられるものが存在する。その場合、動詞語幹に語幹形成辞-ol/-alが接辞された形式が複数形となり、単数形は、その複数形にさらに接尾辞-o/-aが接辞されて形成される。語幹形成辞-ol/-alの接辞のしかたは、数の接尾辞-o/-aと同様に語幹の母音との母音調和によって決定される。

例) i-wal-at (pl.) e-wal-at-a (sg.) 'answer' ← a-wal 'to reply'

この例と同じ語幹形成辞-alと数の接尾辞-aが接辞されていると考えられるにもかかわらず、単数形のみが記録されている名詞が存在する。

例) e-nyorr-at-a (sg.) 'likinkg' ← a-nyorr 'to like'

・動詞が記録されていないか、あるいは、動詞が失われてしまったせいで、動詞から派生した名詞とは確定できないけれど、動詞から派生した名詞であると考えられる名詞がかなりの数、存在する。それらの名詞は、複数形が／o t／、あるいは、／a t／で終わり、単数形が／o t o／、あるいは、／a t a／で終わる。

例) in-kipaai (pl.) en-kipaai-a (pl.) 'dance before raid'

・語幹形成辞-ol/-alでつくられる名詞のほかにも、動詞から派生した名詞が存在する。

例) ink-akeny (pl.) enk-akeny-a (sg.) 'morning'

← a-kenyu 'to rise (of sun)'

語幹形成辞をもつものや語幹形成辞をもたないものを含めて、動詞からの派生名詞をのぞくと、この類に属する名詞の数は少なくなる。

・接尾辞-oが接辞されるのにもとない、音韻変化をおこすものが2例存在する。

例) in-aisui (pl.) en-aish-o (pl.) 'burnt stump' ← a-isui 'to singe'

2. 2. 2. 接尾辞 -i

・接尾辞によって複数形から単数形がつくられる名詞のなかで、この接尾辞で単数形がつくられる名詞がその数がもっとも多い。

・複数形が子音／k／で終わるとき、その単数形において、子音／k／は接尾辞-iのまえで鼻音／n／に変化したり、あるいは、脱落したりすることがある。

例) in-kulupuok (pl.) en-kulupuon-i (sg.) 'dust, earth' (k → n/o_i)

i-modiok (pl.) e-modio-i (sg.) 'cow dung' (k → 0/o_i)

ただし、どのような条件で子音／k／が鼻音に変化するのか、あるいは、脱落するのかは、明らかではない。また、同じ環境にあると考えられる子音／k／がまったく変化も脱落もしないことがある。このようなことがなぜ起こるのか、明らかではない。実際、子音／k／が変化も脱落もしない形式と、子音／k／が脱落する形式が、同一の名詞の単数形として共存することがある。

例) il-otorok (pl.) ol-otorok-i / ol-otoko-i (sg.) 'bee'

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞のなかには、明らかに動詞から派生したと考えられるものがある。

例) il-omon (pl.) ol-omon-i (sg.) 'stranger' ← a-omon 'to beg'

2. 2. 3. 接尾辞 -ei, -ai

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞は、2例のみが記録されている。もし、

この接尾辞-eiと-aiの母音／e／と／a／が名詞語幹の一部であると考えられるなら、数の接尾辞は-iと考えられる。そうすれば、この類に属する名詞は、2. 2. 2の類に属することになる。

例) il-kiku (pl.) ol-kiku-ei (sg.) 'thorn'

2. 2. 4. 接尾辞 -ni

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞は、5例のみが記録されている。しかも、その単数形が／o ni／、あるいは、／a ni／で終わる。この音連続は、2. 2. 2の類に属する名詞のなかの、子音／k／が母音／o／と／i／、あるいは、母音／a／と／i／の間で鼻音／n／に変化した形と全く一致する。複数形の末尾の位置には、子音／k／は、実際には存在しないけれど、子音／k／を複数形の末尾の位置に仮定できるなら、この類に属する名詞も2. 2. 2の類に属することになる。

2. 2. 5. 接尾辞 -ila, -la, -nta

・これらの接尾辞で単数形がつくられる名詞は、それぞれ1例が記録されている。

例) i-masaa (pl.) e-masaa-ila (sg.) 'treasure'

2. 2. 6. 接尾辞 -ng'o, -na, -uo

・これらの接尾辞で単数形がつくられる名詞は、それぞれ1例が記録されている。これらの接尾辞の一部である／ng'／や／n／や／u／は、本来、名詞語幹の一部であった可能性がある。この事実は、これらの単語をナイル諸語に属する他の言語の同じ起源をもつと考えられる単語と比較することによって分かる。これら／ng'／や／n／や／u／が語幹の一部であれば、この類に属する名詞は、2. 2. 1の類に属することになる。

例) in-kiri (pl.) en-kiri-ng'o 'meat' (cf. ルオ語 ring'o 'meat')

2. 2. 7. 接尾辞 -u

・この接尾辞によって単数形がつくられる名詞は、ただ1例のみが記録されている。

例) in-kung' (pl.) en-kung'-u (sg.) 'knee'

2. 3. 単数形と複数形の両方に数の接尾辞をもつ名詞

単数形と複数形の両方に数の接尾辞をもつと考えられる名詞が、いくつか記録されている。ただし、そのなかには数の接尾辞としているが、じつは、語幹の一部である可能性を残しているものもある。

2. 3. 1. 接尾辞 -e (sg.) / -a (pl.), -e (sg.) / -o (pl.), -i (t) (sg.) / -o (pl.),
-o (sg.) / -a (pl.), -o (sg.) / -i (pl.), -i (sg.) / -ni (pl.)

・2. 2節で述べた単数形をつくる接尾辞のなかに、接尾辞-iと-oは存在するが、-eは存在しない。また、2. 1節で述べた複数形をつくる接尾辞のなかには、接尾辞-aと-oと-iと-niは存在する。この事実から、数の接尾辞として接尾辞-eの存在は疑わしい。単数形の語末の母音 / e / を接尾辞と考えないならば、接尾辞-e (sg.) / -a (pl.) と接尾辞-e (sg.) / -o (pl.) によって、単数形と複数形がそれぞれつくられると考えた名詞は、じつは、複数形だけが数の接尾辞をもつことになる。もしそうなら、接尾辞-e (sg.) / -a (pl.) と接尾辞-e (sg.) / -o (pl.) によって、それぞれ単数形と複数形がつくられるとした名詞は、接尾辞-aと接尾辞-oによって複数形がつくられる名詞の類、つまり、2. 1. 5の類に属することになる。

例) ol-ash-e (sg.) il-ash-o (pl.) 'calf'

・接尾辞かどうか疑いのある接尾辞-e (sg.) を含む、接尾辞-e (sg.) / -o (pl.) と-i (t) (sg.) / -o (pl.) によって単数形と複数形がつくられる名詞、つまり、複数形に接尾辞-oをもつ名詞は、合計6例が記録されている。また、単数形が接尾辞-iではなく、-itで終わる名詞が1例のみ記録されている。2. 2節で述べた単数形をつくる接尾辞のなかに接尾辞-itaが存在する。このことから、接尾辞-itは、接尾辞-itaの末尾の母音が脱落したものである可能性がある。ただし、接尾辞-itaをもつ名詞は、ただ1例のみが記録されているだけである。

2. 3. 2. 接尾辞 -i (sg.) / -u (pl.), -ei (sg.) / -o (pl.), -i (sg.) / -n (pl.)

・この類に属する名詞の特徴は、単数形が必ず接尾辞-i、あるいは、-eiで終わっていることである。それにたいして、複数形は接尾辞-u、あるいは、-o、あるいは、-nで終わっている。しかし、2. 1節で述べた複数形をつくる接尾辞のなかには接尾辞-uは見当たらない。このことから、この接尾辞-uは数の接尾辞であるか疑わしい。複数形の語末の母音 / u / が数の接尾辞ではなく、名詞語幹の一部であるなら、接尾辞-i (sg.) / -u (pl.) によってそれぞれ単数形と複数形がつくられるとした名詞は、接尾辞-iで単数形がつくられる名詞の類、つまり、2. 2. 2の類に属することになる。

2. 4. 単数形のみ存在し、複数形のない名詞

単数形のみ記録されていて、複数形が記録されていない名詞の類が存在する。単数形のみが記録されているので、本来は、どの部分が語幹で、どの部分が接尾辞であるかは決定

できないのだけれど、2. 2 節で述べた接尾辞と同じ形式が単数形の末尾の位置に観察される。

2. 4. 1. 接尾辞 -oto/-ata

・接尾辞-otoが接辞されるか、あるいは、-ataが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。単数形の末尾が-oto/-ataで終わる名詞は、2. 2. 1の類の名詞で、語幹形成辞-ol/-alと数の接尾辞-o/-aが接辞されて形成される単数形と全く同じ形をしている。しかも、2. 2. 1の類に属する名詞と同じように、明らかに動詞から派生したと考えられる名詞が存在する。ただし、2. 2. 1の類に属する名詞とは違って、複数形をもたない。

例) en-dung'-oto (sg.) 'cutting' ← a-dung' 'to cut'

・後で述べる接尾辞-ore/-areや接尾辞-o/-aによってつくられる単数形と、接尾辞-oto/-ataでつくられる単数形とが自由変種として併存することがある。

例) en-kiteng'en-ata / en-kiteng'en-a (sg.) 'education'
← a-iteng'en 'to educate'

・動詞が記録されていないため、動詞から派生した名詞であるか明らかではないが、単数形が-oto/-ataで終わる名詞が存在する。

例) en-gol-oto (sg.) 'difficulty'

2. 4. 2. 接尾辞 -ore/-are

・接尾辞-oreが接辞されるか、あるいは、-areが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。明らかに動詞から派生した名詞と考えられるものがこの類に存在する。

例) e-ng'or-ore (sg.) 'hunting' ← a-ng'or 'to hunt'

・接尾辞-oto/-ataでつくられる形式の自由変種として、接尾辞-ore/-areによってつくられる形式が併存することがある。

・動詞は見つからないので派生名詞かどうか明らかではないが、接尾辞-areをもつと考えられる名詞が、1例記録されている。

例) e-sul-are (sg.) 'scandal'

2. 4. 3. 接尾辞 -on/-an

・接尾辞-onが接辞されるか、あるいは、-anが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。明らかに「性状」を表す動詞から派生したと考えられる名詞がこ

の類に存在する。

例) em-borr-on (sg.) 'calmness' ← a-bor(r) 'to be calm'

2. 4. 4. 接尾辞 -o/-a

・接尾辞-oが接辞されるか、あるいは、-aが接辞されるかは、語幹の母音との母音調和によって決定される。明らかに「性状」を表す動詞から派生したと考えられる名詞がこの類に存在する。

例) en-kiborr-a (sg.) 'whiteness' ← a-ibor(r) 'to be white'

ただし、この接尾辞-o/-aは名詞を形成する接尾辞ではなく、動詞語幹を形成する接辞である可能性がある。以下の例で、動詞、a-isis-aにおける接尾辞-aは、「状態」動詞を派生する接辞と考えられる。もし下の名詞が状態動詞から派生した名詞なら、この名詞の形式は、数の接尾辞をもっていないことになる。

例) en-kisis-a (sg.) 'praise'

cf. a-isis-a 'to be renowned' ← a-isis 'to praise'

2. 4. 5. 接尾辞 -i

・この類に属する名詞には、明らかに動詞から派生したと考えられる名詞が存在する。

例) e-munyan-i (sg.) 'good fortune' ← a-munyanu 'to become fortunate'

・この類に属すると考えられる名詞のなかに、末尾が/e i/で終わる名詞が1例記録されている。この母音/e/は、動詞語幹を形成する接辞である可能性がある。

例) o-ramat-ei (sg.) 'cattle arrangement' ← a-ramat 'to tend cattle'

2. 4. 6. 接尾辞 -isho

・接尾辞-ishoによって単数形がつくられる名詞には、動詞、あるいは、形容詞から派生した名詞であるとはっきり分かる名詞が3例、派生名詞かどうかはっきりしない名詞が1例、記録されている。

例) en-karsis-isho (sg.) 'wealth' ← karsis 'rich'

e-sunkure-isho (sg.) 'guile'

2. 4. 7. 接尾辞 -it

・接尾辞-itによって単数形がつくられる名詞は、ただ1例のみ記録されている。

例) em-pong'-it (sg.) 'swelling of stomach'

← a-pong'u 'to swell (stomach)'

2. 4. 8. ゼロ接尾辞

・動詞語幹になんら接尾辞を付加することなく、そのままの形式で名詞語幹として用いられることがある。このような派生をする名詞は、ゼロ接尾辞をもつと定義しておく。また、2. 4. 4 で見たように接尾辞-o/-aが名詞語幹をつくる接辞ではなく、動詞語幹をつくる接辞であるならば、そのような名詞もこの類に属することになる。

例) en-jian (sg.) 'swelling' ← a-jian 'to swell'

2. 4. 9. その他

・2. 1 節、2. 2 節、2. 3 節で述べた名詞のように対をなす複数形が存在すれば、単数形が数の接尾辞をもつかどうか決定できるのだが、あるいは、2. 4. 1 から 2. 4. 8 までの類に属する名詞のように、明らかにそれが派生したもとの語幹が記録されていれば、接尾辞を決定することができるのだが、そのどちらでもない、単数形だけが記録されている名詞が存在する。

例) ol-marua (sg.) 'beer'

2. 5. 複数形のみ存在し、単数形のない名詞

複数形のみ記録されていて、単数形が記録されていない名詞の類が存在する。

2. 5. 1. ゼロ接尾辞

・明らかに動詞から派生したと考えられる名詞が存在する。このとき名詞は、なんら接辞をとみなわない。

例) im-pended (pl.) 'remnants' ← a-pended 'to tear into threads'

2. 5. 2. 「複数形の複数形」、接尾辞 -arei, -rei

・複数形に接辞され、いわゆる「複数形の複数形」とも呼べる形式つくる接尾辞が存在する。これらの接尾辞をもつ名詞、2 例が記録されている。

例) kule (pl.) 'milk' kulia-rei (pl.) 'milk, collective'
il-tung' ana (k) (pl.) 'person' il-tung' anak-arei (pl.) 'populace'

2. 6. 単数形と複数形が全く異なる語幹からなる名詞

単数形と複数形が全く異なる語幹からなる名詞が、わずかに記録されている。

例) ol-cani (sg.) il-keek (pl.) 'tree, wood'

2. 7. 単数形と複数形が声調によってのみ区別される名詞

単数形と複数形が分節的には全く区別がなく、ただ声調によってのみ区別される名詞が存在する。⁷⁾

例) ol-tuli (sg.) il-tuli (pl.) 'buttock'

・この類に属する名詞は、その語末が必ず母音で終わっている。単数形と複数形の両方が母音／a／で終わる名詞が1例、母音連続／ua／で終わる名詞が2例、記録されている。単数形と複数形の両方が母音／o／で終わる名詞が記録されている。単数形と複数形の両方が母音／i／で終わる名詞が2例、母音連続／oi／で終わる名詞が2例、母音連続／ai／、あるいは、／ei／で終わる名詞がそれぞれ1例、記録されている。したがって、この類の属する名詞は、単数形と複数形の両方が母音／a／か／o／、あるいは、母音／i／で終わることが分かる。

母音／a／、あるいは、／o／からなる数の接尾辞-o/-aは、2. 1節の複数形をつくる接尾辞と2. 2節の単数形をつくる接尾辞のなかに見つけることができる。また、母音／i／からなる数の接尾辞-iは、2. 1節と2. 2節の接尾辞のなかに見つけることができる。ゆえにこの類に属する名詞は、単数形か複数形に、あるいは、その両方に数の接尾辞をもっていると考えられるが、声調体系の研究が進んでいない今の段階では、単数形と複数形のどちらに、あるいは、その両方に数の接尾辞が接辞しているか決定することはできない。

3. 名詞の分類

2章でおもに形式の面から考察した数の接尾辞について、3章では名詞が複数形、あるいは、単数形がつくられるとき、それらの接尾辞のうちどの接尾辞が選択されるかを見る。また、マサイ語において名詞がなんらかの範疇によって分類されており、その範疇にしたがって接尾辞が選択されているかどうかを観察する。まず、その前に2章で見た接尾辞を表にまとめておこう。

つづく頁の表1と表2から分かることは、同じ形式をした接尾辞が単数形をつくるのにも複数形をつくるのにも用いられることである。たとえば、数の接尾辞-iは、複数形をつくるのにも、単数形をつくるのにも用いられる。表1で同じ形式をした接尾辞の対応を調べてみれば、単数形をつくる接尾辞すべては、それらとほぼ同じ形式をした接尾辞が複数形をつくる接尾辞のなかに見つけられる。この事実から、これらの単数形、ならびに、複数形をつくる接尾辞は、接尾辞自体に単数性や複数性を表す特性が存在するのではなく、これらの接尾辞は、ただたんに数の区別を行なう機能だけを果たしている。それらの接尾辞が接辞されたとき、接辞された形式が単数を示すか、あるいは、複数を示すかは接辞さ

れる名詞の本来の意味によって決定される。このことから、マサイ語の名詞は、その本来の意味によってなんらかの範疇化されていることは明らかである。すくなくとも数に関して、なんらかの範疇化は行なわれているのは明らかである。では、それ以外の範疇化は存在するだろうか。

表1 数の接尾辞(1)

複数形をつくる接尾辞 単数形をつくる接尾辞

-i	-i
	-ei, -ai
-ni	-ni
-n	
-in	
-o/-a	-o/-a
	-ng'o, -na, -uo
-lo/-la	-ila, -la, -nla
-t	
-(i)lin	
-ra/-rak, -re, -rei	-u
-ilei	
-ie	
-ishi	
-ok/-ak, -ek, -ik	
-ji, -ja	

表2 数の接尾辞(2)

単数形と複数形の両方に 接尾辞をもつ名詞	単数形のみ 記録されている名詞	複数形のみ 記録されている名詞
-e (sg.) / -a (pl.)	-oto/-ata	-arei
-e (sg.) / -o (pl.)	-o/-a	

表2 (つづき)

-o (sg.) / -i (pl.)	-orc / -arc
-o (sg.) / -a (pl.)	-on / -an
-i (sg.) / -ni (pl.)	-i
-i (sg.) / -u (pl.)	-isho
-ei (sg.) / -o (pl.)	-it
-i (sg.) / -n (pl.)	

3. 1. 名詞分類の範疇化

マサイ語における名詞分類の範疇を抽出するためには、マサイ語内部で直接的証拠を探さなければならない。しかし、一見したところでは、マサイ語の名詞体系には明確な分類範疇を見つけることが困難に思われる。そこで従来の研究によって発見された名詞分類の範疇を援用して、それらの範疇を用いてまず大雑把にマサイの名詞を分けてみる。それら大雑把に分けられたグループのその分け方が適当であったかを検討し、さらにそのグループのなかでなんらかの範疇化が行なえるかどうかを検討する。

クレイグは、言語に普遍的に共通する名詞分類の範疇の意味特徴として、第1に人間か人間でないか (humanness)、または、生物か非生物か (animacy)、第2に名詞が指示するモノの形 (shape)、第3に名詞が指示するモノの使用法 (use) と密度 (consistency) をあげている (Craig: 1986, p. 5)。たとえば、印欧語の文法「性」をもつ言語は、第1番目の人間か人間でないか、あるいは、生物か非生物かを意味特徴とする範疇だけの分類体系をもっていると考えられる。

さらに、クレイグは、具象物の物理的特徴による分類の一般化を行なっているが、それによるとまず第1にモノの一次元の同定が行なわれ、第2にモノの二次元の同定が行なわれ、さらにモノの密度 (consistency) が同定される前にモノの硬さ (rigidity) がさきに同定され、最後に柔軟さ (flexibility) が同定される (Craig: 1986, p. 6)。

以上の範疇化の具体例として、クライダーによるバントゥー祖語の名詞のクラスの意味特徴を見てみよう。クライダーは、14の名詞のクラス (単数と複数が対となったクラスを含む) をバントゥー祖語に認めている。まず、名詞を数えられる名詞 (count) と質量名詞 (mass) に2分割する。数えられる名詞は、さらに、形状を持つ名詞 (configuration) と種名詞 (kind) に2分割する。形状を持つ名詞は、密な形の名詞 (solid figure) と輪郭の形

の名詞 (outline figure) に分けられる。密な形の名詞は、拡がりのない名詞 (non-extended) と拡がった名詞 (extended) に分けられ、それぞれが、さらに個体 (unit) と集合 (collection) に分けられる。一方、輪郭の形の名詞は、まず、個体と集合に分割され、そして、個体は拡がりのない名詞と拡がった名詞に分けられる。また、種名詞は、生物名詞 (animate) と人工物名詞 (artifact) に分割される。さらに、生物名詞は、人間 (human) と動物 (animal) に分けられる。質量名詞は、凝集した名詞 (cohesive) と離散した名詞 (dispersive) に分割される。凝集した名詞は、固体 (solid) と液体 (liquid) に分けられ、さらに、固体は均質なモノ (homogeneous) と均質でないモノ (differentiated) に分けられる⁸⁾。

クレイグによる普遍的範疇は、あまりに抽象化されていて、マサイ語における名詞の範疇化を考察するには不便に感じられる。そこでピンカーがあげている人間の心的モジュールを見てみよう。ピンカーは15項目の心的モジュールを提案している⁹⁾。

1. 力学的直感—対象物の働き、力、変形
2. 生物的直感—動植物の仕組みを理解する
3. 数
4. 広いテリトリーについての心的地図
5. 住みかの選択—概してサバンナのような安全で情報量に富み、生産的な環境を見つけ出す
6. 危険—恐怖感、用心する感覚、高所、閉所、危険をはらむ社会的出会い、毒のある、あるいは、肉食の動物に対する恐怖、これらが害をなさない状況を覚えようという気持ち
7. 食べもの—どれが食用に適するか
8. 汚染—嫌悪感、本来的に嫌悪の対象になりそうなものに対する反応のしかた、感染と病気についての直感
9. 満足のいく状態であるか否かの点検—幸福感や悲しみなどの感情、満足な気分や落ち着かない気分
10. 心理学的直感—他人の信条や欲求から、その人がどんな行動をとるか予想する
11. 心的住所録—個々人についてのデータベース、親族関係、身分、恩恵のやり取りの歴史、技能や強みなどの欄がある、それぞれの特徴についての評価基準
12. 自像—他者にとって自分はどんな価値を持つかについて情報を集めて整理する
13. 正義—権利、義務、功罪の感覚、怒りや復讐心などの感情

14. 親族関係—縁者ひいきや、子育ての役割分担

15. 配偶関係—性的魅力、愛情などの感情や、忠実である意図、捨て去る意図

ピンカーのあげる心的モジュールが言語化される範疇とそっくり一致するわけではないが、クライダーによるバントゥー祖語の名詞のクラスの意味特徴と一致する部分がある。たとえば、ピンカーの心的モジュールのうち、1番目のものは、形状をもつ名詞 (configuration) とその下位範疇に相当するし、2番目のものは、種名詞 (kind) の生物名詞 (animal) とその下位範疇に相当するし、3番目のものは、個体 (unit) と集合 (collection) に相当すると考えられる。詳しくピンカーの心的モジュールとクライダーの名詞のクラスの意味特徴を検討すれば、さらに一致する部分を見つけることができるであろう。しかし、これ以上の両者の検討は別の機会に委ねるとして、ピンカーの心的モジュールを参考に、マサイ語の名詞分類の範疇を検討するために、いま暫定的な意味特徴を指定して、その暫定的な意味特徴で名詞をグループに分けてみよう。そして、そのグループ分けが適当であれば、グループ分けに用いた暫定的な意味特徴がマサイ語の名詞分類の範疇として認めることになる。また、そのグループ分けが不適当であれば、マサイ語の名詞分類の範疇として、グループ分けに用いた暫定的な意味特徴を修正することになる。

暫定的な意味特徴は、「人間、職業」、「身体名称」、「動物」、「植物」、「自然、地形」、「社会組織」、「具象物」、「抽象物」である。これらの暫定的な意味特徴でタッカーとムパイエイの「マサイ語文法」の語彙集からすべての名詞をグループ分けしてみる。

3. 1. 1. 「人間、職業」

以下の表において、pl. で始まる行に載せている名詞は、単数形を基準にして単数形に接尾辞を付加して複数形をつくる名詞であり、sg. で始まる行に載せている名詞は、複数形を基準にして複数形に接尾辞を付加して単数形をつくる名詞である。また、sg. /pl. で始まる行に載せているのは、単数形と複数形の両方に接尾辞をもつ名詞である。sg. のみ、あるいは、pl. のみとあるのは、それぞれ、単数形のみ、あるいは、複数形のみが記録されている名詞である。toneのみと書かれている名詞は、声調のみによって単数と複数が区別される名詞である。[Derived noun]とあるのは、動詞あるいは形容詞から派生された名詞であり、[Borrowed]とあるのは、借用語である。

表3 名詞分類(1)

pl. -i	(3) herdsman, old man, [Derived noun] old woman
pl. -ra	(1) brother/sister
pl. -n	(1) bride
pl. -a (ak)	(4) ancestor, male, full-grown female, [Derived noun] disciple
pl. -ak/-ok	(4) woman, person, medicine man, [Derived noun] oldman
pl. -ni	(2) [Borrowed] teacher, DC
pl. of pl. -arei	(1) populace
sg. -i	(8) [-ani/-oni (sg.)// -ak/-ok (pl.)] healer, carpenter, initiate, one who prevents, dreamer, woman who has just had a baby, woman young warrior
sg. -i	(11) shaved initiate, warrior, European and Asian, child, twin, European, initiate, hypocrite, sick person, [Derived noun] fool, stranger
sg. -ni	(1) Maasai
Irregular	(1) girl

接尾辞-niによって複数形がつくられる借用語、接尾辞-areiによって複数形がつくられる「複数の複数」など少数の名詞を除くと、表3の多くの名詞は、2つのグループに分けることができる。それらは、複数形に接辞-ak-/-ok-を持つグループと持たないグループである。複数形に接辞-ak-/-ok-を持つ名詞は、その意味特徴として「～をする人」という意味をもっていると考えられる。複数形に接辞-ak-/-ok-を持たない名詞は、「～状態の人」という意味をもっていると考えられる。さらに、接尾辞が複数形に接辞されて、単数形がつくられる名詞は、自然界において複数で存在するのが自然な名詞である。

マサイ語において名詞の複数形、あるいは、単数形のつくり方を決定するもっとも重要な要素は、その名詞が指示するモノが自然界において複数で存在するのが自然であるか否かである。このことは、複数形、あるいは、単数形のつくり方が問題になっているのだから当然とも言えるのだが、この後に言及する様々な意味特徴の名詞グループにおいても、

名詞が指示するモノの数のあり方が重要な要素となる。これは、ピンカーの心的モジュールの3番目のものに相当する。さらに、「～する人」と「～状態の人」という意味特徴は、心的モジュールの11番目のものに相当する。

3. 1. 2. 身体名称、生理現象

表4 名詞分類(2)

pl. -i	(5) body, back, face, anus, palm
pl. -ni	(3) thumb, little finger, head
pl. -ie, -itie	(4) mouth, udder, chest, stomach
pl. -to	(1) skin [-it (sg.)/-ito (pl.)]
pl. -a/-o	(8) belly, tongue, resonance, neck, throat, vein, ear, afterbirth
pl. -ta	(1) blood
pl. -ja	(1) heart
sg. -i	(4) rib, tooth, saliva, phlegm
sg. -ni	(1) corpse
sg. -a	(5) head, entails, hair, breast, hand
sg. -u	(1) knee
sg. -i/pl. -u	(1) lung
sg. -ei/pl. -o	(1) beard
sg. -to/pl. -k	(1) bone
sg. -u/pl. -ek	(2) foot, eye
sg. -e/pl. -a	(1) wound
sg. のみ	(4) breath, hard excreta, malaria, smallpox
pl. のみ	(1) urine
tone のみ	(1) buttock

数に関しては、やはり、自然界において複数で存在するのが自然であるモノを指示する

名詞は、単数形が複数形から接尾辞が付加され、つくられる。数に関しての区分けのほか
に、表4の名詞から特徴ある2つのグループを分けることが可能である。ひとつは、接尾
辞-iを持つ名詞のグループであり、もうひとつは、接尾辞-a/-oを持つ名詞のグループで
ある。接尾辞-iを持つ名詞は、若干の例外はあるけれど、たいていは、身体の外観できる
部分を指示する。接尾辞-a/-oを持つ名詞は、たいてい、身体の内蔵部分を指示する名詞
である。この意味特徴は、心的モジュールの2番目に相当する。

3. 1. 3. 動物

表5 名詞分類 (3)

pl. -i	(18) game, waterbuck, giraffe, rhinoceros, buffalo, eland, impala, ram, ox kept for emergency, he-goat, castrated bull, ewe, crow, fat piece of meat, part of animal's intestine, swarm, jigger
pl. of pl. -i	(1) flocks
pl. -in	(1) dog
pl. -n	(2) colobus monkey, hartebeest [-in]
pl. -n	(4) hare, horse, frog, forearm [-an, -on, -en]
pl. -ni	(2) hen, poisonous centipede
pl. -ji	(1) goat
pl. -a/-o	(7) snake, elephant, hyena, wart hog, lion, sheep, kid
pl. -kok, -ak	(3) bull, jackal, beast of prey
pl. -ishi	(4) male donkey, voice, hind leg, skull
pl. -rak	(1) horn
pl. of pl. -rei	(1) herds collectively
sg. -i	(13) herd, wild dog, maneless lion, porcupine, tail, fish, locust, tick, butterfly, bee, egg, duck, cow dung
sg. -ni	(3) rat, ant., fly
sg. -a/-o	(8) wild animal, donkey, skin of goat, tail hairs, clow, feather, meat, ear markings

表5 (つづき)

sg. -o/pl. -i	(1) ox
sg. -o/pl. -a	(1) heifer
sg. -it/pl. -o	(1) marrow (of) bone
sg. -e/pl. -o	(1) calf
sg. -i/pl. -ni	(1) lump of meat
sg. -i/pl. -n	(1) ostrich,
Irregular	(2) cow, leopard
sg. のみ	(2) old dry dung, leather funnel for feeding calf
tone のみ	(4) baboon, bird, maggot, maggot in nose of animal

数に関する分類のはかに、表5の名詞には意味特徴について特徴のあるグループが存在する。それは、接尾辞-iによって複数形がつくられる名詞である。これらは、食用となる大型の哺乳類をあらわす名詞である。一方、接尾辞-a/-oによって複数形がつくられる名詞は、野性動物でも食用にならない動物をあらわしている。また、重要な家畜の一般名称は、単数形にも複数形にも接尾辞をもつ形式になっているか、あるいは、不規則な形式になっている。複数形から接尾辞が付加されて単数形がつくられる名詞は、自然界において複数で存在するのが自然であるモノ、ちいさな昆虫や動物の身体などが主であるが、また、このグループに属する野性動物は、食用にならない。

これらの意味特徴は、心的モジュールの2番目と、7番目の「食べもの」とに相応する。

3. 1. 4. 植物

表6 名詞分類 (4)

pl. -i	(1) mushroom
sg. -i	(8) maize, barkot tree, poison arrow tree, reed, sodom apple, sisal, flower, large firewood log
sg. -ei	(1) thorn
sg. -a/-o	(3) grass, branch, burnt stump
sg. -uo	(1) charcoal

表6 (つづき)

sg. -i/pl. -o	(1) fig tree
sg. のみ	(1) first grass after rain or fire
Irregular	(1) tree

表6から分かるように植物を指示する名詞は、単数形を基準にして単数形に接尾辞を付加して複数形をつくる名詞は、ただ1例のみが記録されていて、しかも、それは「茸」を意味する。動物を指示する名詞の場合にも観察されたのだが、マサイ語の話し手は、自然にたいして豊かな知識をもっていて、その知識に裏付けられた名詞の分類を行なっている。「茸」に関しては、それが自然界で単独で存在するのが自然であるか、否かで範疇化されているのではなく、心的モジュールの8番目の「汚染－嫌悪感」に相当する範疇で分類していることと考えられる。

3. 1. 5. 自然、地形

表7 名詞分類 (5)

pl. -i	(13) range of hills, stony place, dry steppes, lawn, bush country, forest, spring of water, pool, ditch, ditch, trail, sun, shadow
pl. -n	(2) river, wet season
pl. -in	(1) mud
pl. -ni	(1) deserted site
pl. -(r) (i) tin	(7) rain, daylight, night, time, moon, dry season, place
pl. -a/-o	(3) river, river bank, stone
pl. -k	(1) water
pl. -t	(1) hillside
sg. -i	(8) heavy shower, shower, salt-lick, mud formed from rain and old dung, sand, small bush, dust
sg. -a/-o	(8) foam, bank, star, boundary, corner, valley, enclave, hole
sg. -o/pl. -i	(1) cool and wooded country

表7 (つづき)

toneのみ	(1) mountain
sg.のみ	(5) west, evening, early morning, darkness, red ochre

明らかに特徴のある意味特徴をもった名詞のグループが存在する。それは、接尾辞-(r) (i) tinによって複数形がつくられる名詞である。これらは、時間の概念と関連する意味をもった名詞である。また、一日のある時刻を指示する名詞は、単数形のための名詞になる。また、接尾辞-iによって複数形、あるいは、単数形がつくられる名詞が指示する自然、または、地形は、接辞-a/-oによって複数形、あるいは、単数形がつくられる名詞が指示する自然、地形よりも人間により身近なものである。これらの名詞を分類する範疇は、心的モジュールの4番目と5番目に相当すると考えられる。

3. 1. 6. 社会組織

表8 名詞分類(6)

pl. -i	(3) country, permanent village, debt
pl. -n	(4) large village, tribal section, community, quarrel
pl. -in	(4) trick of trade, raiding force, war, theft
pl. -a/-o	(6) division of warriors, clan, warrior's village, presents to prospective father-in-law, prophecy conditions, dance before raid
pl. -(r) (i) tin	(3) neighbours, battle, migration
pl. -k	(1) home
pl. -re	(1) circumcision
pl. -ta	(2) friend, family%
sg. -a	(1) name
sg. -nta	(1) enemy
sg. -i/pl. -o	(1) blacksmith
toneのみ	(2) family%, settlement area

表8 (つづき)

sg. のみ	(6) wedding, companionship, lion hunt, school, devination, centre part of a manyata
pl. のみ	(1) crime

「鍛冶屋」を指示する名詞は、人間の範疇の名詞グループに所属させるべきかもしれないが、「鍛冶屋」の社会的な特別な役割りを考えれば、社会組織の名詞グループに所属させるのがよいであろう。表8において特徴のある名詞グループは、「友人」と「家族」である。特に「家族」を指示する名詞は、接尾辞によって複数形がつくられる形式と声調のみによって単数と複数が区別される形式が自由変種として存在する。声調によってのみ単数を複数が区別される形式にたいして、接尾辞-laによってわざわざつくられた複数形が存在する。この事実は、接尾辞-laによって複数形がつくられる名詞がなんらかの範疇で分けられたグループを形づくっていることを示している。表8の名詞に見られる範疇化は、心的モジュールの11番目に相当すると考えられる。

3. 1. 7. 具象物

表9 名詞分類(7)

pl. -i	(24) quiver, spear but, shield, pocket-like fold in woman's garment, garment of favour worn by warriors after vowing to win, skin hut, matting, wooden container, pot, barrel, coal fire, poisin, dummy, bridge, rampart, [Borrowed] fork, book, table, watch, lamp, aeroplane, shop, camp,
pl. -ni	(12) potsherd, clothes, razor, [Borrowed] newspaper, pencil, paper, bullet, two shilling piece, plate, motor-cycle, spoon, motor-car,
pl. -n	(16) wooden ear-plug, warrior's pigtail, club, stick, tobacco, bell, brand mark, leather broom for sheep pen, gate, half-calabash, small calabash, small gourd, flute, grave, cultivated field, [Borrowed] beer
pl. -a/-o	(16) bag, sword, weapon, paint on face, tweezers, tongs, blocked arrowhead for bleeding cattle, axe, cooking pot,

表9 (つづき)

	bridge, [Derived noun] wedge, house, eraser, spear, pack-saddle, digging instrument
pl. -ta	(4) calf pen, strap, post, [Derived noun] guard-hut
pl. -(i) lo	(2) gourd for milk, branches used as village barricade at night
pl. -itie	(3) boma, kraal, fire
sg. -i	(9) paper, quid (of tobacco), rope, collar for bell, wire, cowry, woman's scrolled ear-rings, magical charm, old man's stick
sg. -o	(1) cord
sg. -o/pl. -i	(1) bow
sg. -i/pl. n	(1) bead
sg. -e/pl. -a	(2) sandal, arrow
sg. -a/-o	(3) shelter, sheep pen, path
toneのみ	(1) road
pl. のみ	(2) milk, [Derived noun] food
sg. のみ	(9) meat preserved in fat, porridge, butter, beer, white salt, smell of meat roasting, smoke, dew, drop of liquid

表9において、特徴のある名詞グループがいくつか存在する。接尾辞-nによって複数形がつくられる名詞グループは、主に男が持つ持ち物と牧畜に関係する品物を指示する名詞からなっている。接尾辞-la、あるいは、-(i) loによって複数形がつくられる名詞は、明らかに牧畜に関係あるモノを指示する。また、接尾辞-itieで複数形がつくられる名詞は、社会でなにか特別な意味をもつ名詞である。すでに述べた動物などの暫定範疇の名詞グループでも同様の特徴が見いだされるのであるが、単数形と複数形の両方に接尾辞をもつ名詞は、社会で重要なモノを指示する名詞である。接尾辞-iによって単数形がつくられる名詞は、複数形が基準で複数形から単数形がつくられる名詞の範疇が、ただ自然界での

モノの存在のあり方、つまり、自然界で複数で存在するのが自然であるか、否かであるのではなく、名詞が指示するモノの形状に関係していることが分かる。これらの名詞が指示するモノは、「紙」や「ロープ」のように2次元的に延長した形状をもつ。これらの範疇は、心的モジュールの1番目に相当する。また、うえで述べたように、たんにモノの働き、力、変形といった力学的直感だけではなく、そのモノの社会的役割りが範疇化される基準となっている。

3. 1. 8. 抽象物

表10 名詞分類(8)

pl. -i	(3) side, middle, needs
pl. -n	(2) part, story
pl. -in	(2) colour, [Derived noun] work※
pl. -ni	(1) [Borrowed] wage
pl. -a	(3) deputation, riddle, [Derived noun] curse
pl. -t	(1) [Derived noun] consultation
pl. -(r) (i) tin	(6) thing, song, work※, death, [Derived noun] cleverness, illness
pl. -ishi	(1) something left over
sg. -i	(6) rubbish, trouble, sin, lie, weeping, evil
sg. -ai	(1) message
sg. -a/-o	(20) heap, mark, sort, [Derived noun] ability, instructions, notch, sitting place, truth, singing, answer, deed, holding, entering, sight, summit, sleeping place, spear thrust, flowing, desire {sg. -ata/pl. -at, sg. -oto/pl. -ot}, morning {sg. -a/pl. -o}
sg. -(i) ta	(2) treasure, dripping
sg. のみ	(65) hunger, coldness, salt hunger, [Derived noun] swelling, top, heat, dream, anus, quarrel, worship, pierce, command, praise, trade, anger, pride, pride, hatred, silence, whiteness, bigness {sg. -o}, education, beginning, confusion, telling of

表 10 (つづき)

	news, cutting, effort, overtaking, sifting, gnawing, thunder, shouting, liking, stubbornness, difficulty {sg. -ata/-oto}, digging, leading, hunting, listening, milking, brewing, herding, guarding, slaughter, scandal {sg. -ore/-are}, difficulty, nearness, gentleness, good fortune, fulness, cattle management {sg. -i}, goodness, wealth, settlement, guile {sg. -isho}, calmness, redness, strength, depth, rawness, sharpness, survival life, blackness, lightness {sg. -a/-o}, swelling of stomach {sg. -it}
pl. のみ	(4) turns at herding, tatters, whispering, [Derived noun] remnants
toneのみ	(3) word, [Borrowed] money, angel

表 10 の名詞グループには、動詞、あるいは、形容詞から派生した一群の名詞が属している。これらの派生名詞は、行為そのもの、行為がなされる場所、属性など意味特徴にしたがって、おおよそ付加される接辞が決定している。これらの派生名詞を除けば、あまり特徴のある名詞グループは見つからない。ただ、接尾辞-(r) (i) linによって複数形がつけられる名詞は、なんらかの意味特徴をもった名詞グループを形づくっていると考えられる。

3. 2. まとめ

マサイ語の名詞は、ただたんに数の概念だけで分類されているのではなく、もっと複雑な分類が行なわれているように思える。しかし、以上で見てきたように多くの借用語が名詞の体系内に入ったために、また、名詞のもつ意味が歴史的に変化したために、名詞を分類する範疇の意味特徴が明確に抽出できないものとなってしまうている。だが、おもいきった一般化が許されるなら、以下のようにマサイ語の名詞体系における範疇化の特徴をまとめることができるだろう。

・数について－複数形あるいは単数形のつくり方を手がかりにして、名詞分類の特徴を探ってきたのだから当然であろうが、数の概念に基づく範疇が存在する。そして、それは、名詞が指示するモノが自然界において複数で存在するのが自然であるか、否かにより決定される。また、複数を基準として複数形に接尾辞が付加されて単数形がつけられる名詞の

なかには、2次元的に延長した形状をもつモノを指示する名詞がある。これは、数の概念だけではなく、名詞が指示するモノの形状が範疇化されることを示している。

・生物について－人間、動物、植物は、それぞれ、異なる範疇化が存在する。植物を指示する名詞は、1例を除くすべての名詞が複数形に接尾辞が付加されて単数形がつくられる。動物の名詞のなかに、食用になる動物と食用にならない動物の範疇がある。また、家畜、牧畜に関係する名詞が一つの範疇を形づくっている。身体名称には、外的な器官と内的器官の範疇がある。

・自然、地形について－自然、地形には、人間に身近なものとそうでないものの範疇がある。また、時間に関連する名詞と一日のある時刻をあらわす名詞は、それぞれ独自の範疇を形づくっている。

・社会組織について－「友人」「家族」の独自の範疇が観察できる。また、人間、具象物を指示する名詞のなかに、社会的になにか特別な意味をもつ名詞の範疇が存在する。

注。

- 1) Hollis:1905を参照。
- 2) Hollis:1905はマサイ語の名詞複数形成を、Hollis:1908はナンディ語の名詞複数形成を、Kitching:1915はテソ語の名詞複数形成を、Beech:1911はスク語（ポコット語）の名詞複数形成を記述している。
- 3) Tucker & Mpaayei:1955の付録であるマサイ語語彙集。
- 4) 注3を参照。
- 5) 以下のさまざまな例を見れば、一見、接頭辞によって名詞の数が表示されているように見える。例えば、em-buku (sg.) と im-buku-i (pl.) では、単数形と複数形がそれぞれ接頭辞 em- と im- をもっていて、母音 /e/ と /i/ が単数と複数を表示しているように見える。しかし、これらの母音は、また、接頭辞そのものは、文章においてなど、語が連続するとき、頻繁に脱落する。そのため文章においてなどでは、接頭辞で数の区別がされない。
例) Na kerai (sg.)! 「おーい、子供！」
Na kera (pl.)! 「おーい、子供たち！」
呼び掛けを導く語、Naのあとで接頭辞が脱落している。
- 6) [±ATR] 母音の区別は、表記を省略する。

- 7) 声調は、表記を省略する。
- 8) 詳しくは、Creider:1986を参照。
- 9) 詳しくは、ピンカー：1995を参照。

参考文献

- Beech, M.W.H. 1911. *The Suk, their Language and Folklore*. The Clarendon. London.
- Craig, C. (ed.) 1986. *Noun Classes and Categorization*. John Benjamins. Amsterdam
- Creider, C.A. and J.P. Denny. 1986. 'The Semantics and Noun Classes in Proto-Bantu', in Craig, C. (ed.) *Noun Classes and Categorization*. pp.217-239
- Hollis, A.C. 1905. *The Masai, their Language and Folklore*. Oxford Univ. London.
1908. *The Nandi, their Language and Folklore*. Oxford Univ. London.
- Kitching, A.L. 1915. *A Handbook of the Ateso Language*. Society for the Promotion of Christian Knowledge. London.
- ピンカー、スティーブン. 1995. 「言語を生みだす本能」(椋田直子訳)
NHKブックス、日本放送協会
- Tucker, A.N. & M.A. Bryan. 1962. 'Noun Classification in Kalenjin: Pakot', *African Language Studies*, vol. 3, pp.137-181.
- Tucker, A.N. & J.T. ole Mpaayei. 1955. *A Maasai Grammar with vocabulary*. Longmann. London.